

白秋アートギャラリー (23)

白秋の芸術の一つの原動力

山田恵里

「かごめ、かごめ、籠の中の鳥はいついつ出やる、夜明けの晩に鶴と亀がすべった、うしろの正面だあれ。」

有名なわらべ唄で、現在ではこの形にほぼ統一されているが、かつては様々なバリエーションがあった。例えば富山県では「かごめ、かごめ、籠の中の鳥はいついつ出やる、夕焼ごろに、頭へ頭巾かぶって、うしろの正面だあれ。」、東京の一部では「かごめ、かごめ、籠ん中の鳥は、夜明けに起きて、鶴と亀つるんで、どっちの山高い、こっちの山高い。」であった。こうした地方ごとの差異を採取し、記録することは、学問的に大いに意義があることは間違いない。だがそれが白秋の業績であるならば、白秋が優れた芸術を生み出す原動力の一つを知る上で重要なのではないだろうかと思う。

北原白秋は優れた童謡を数多く創作した。しかし童謡を新しく生み出すだけでなく、地方に古来伝承している童謡を集大成し、文献として後世に残すことをも宿願としてい

たのである。大正末期から雑誌『赤い鳥』『近代風景』を通じて資料を蒐集し、その稿は三千枚に及んだ。幾たびか出版の企画も立てられたが実現しなかった。昭和十七年十月、すでに病篤かった白秋は、弟子である藪田義雄に出版企画について相談し、編纂責任者を命じた。白秋邸内に編纂部が置かれ、白秋の命のある間にせめて一巻だけでもまとめるべく日夜を分かたず励んだが、十一月二日早朝に白秋は逝去した。第一巻上梓は昭和二十一年年十一月である。

『日本伝承童謡集成』全六巻。日本の伝承童謡を歌柄別（子守唄、遊戯唄、天体気象・動植物唄、歳事唄・雑謡）に集大成し、国内を八地区に分けて収録し、同一の童謡の県別、地方別の相違を細かく記録している。同一県内の記録に地域の記載がないこと、提供者の年齢や提供時期の記録がないことなど、学術的資料とするには難があるが、それでも他に類を見ない大がかりな調査であろう。

尚、第一巻の初版発行所に保管してあった遊戯唄篇の未刊原稿（西日本地方）が行方不明になり、編集部が苦境に陥った時に応援したのが「コスモス短歌会」である。該当地区の各支部宛に依頼状を発送し、それに応じて資料を寄せた会員は延べ二百名、篇数にして三千五百篇に及ぶ。資料の浄書や整理には東京在住のコスモス会員が協力した。（『日本伝承童謡集成』後書きによる。）先輩諸氏のご尽力あつての偉業であることに、畏敬の念を強くするのである。